



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | イギリス帝国史からグローバルヒストリーへ                                                        |
| Author(s)    | 秋田, 茂                                                                       |
| Citation     | パブリック・ヒストリー. 2024, 21, p. 2-8                                               |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/95491">https://doi.org/10.18910/95491</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 秋田茂教授退職記念特集

## イギリス帝国史からグローバルヒストリーへ

秋田 茂

本稿では、広島の大学院時代から現在に至る四十余年の研究、現在のグローバルヒストリー (GH) 研究にたどりついた経緯を、学説史や新たな学問分野・研究テーマの開拓とそれを可能にした国際的人脈、研究ネットワークの構築の観点から振り返ってみたい。<sup>(1)</sup>

## I

筆者は 1981 年 – 85 年の 4 年間、広島大学文学研究科博士課程（前期 2 年、後期は 2 年で中退）西洋史学専攻で、英印植民地関係史を題材に研究を始めた。当時の「南北問題」と南アジアの貧困に関心があった筆者は、1980 年の学部時代最後の吉岡昭彦先生（東北大学）の集中講義に感化され、『インドとイギリス』を手掛かりに、19 世紀中葉の英印植民地史の政治社会的<sup>(2)</sup>研究に着手した。当初は全くの植民地政策史、英本国と英領インドの単純な二国間関係しか頭になかったが、1970 年代末の「自由貿易帝国主義」(imperialism of free trade) 論争に触発されて、<sup>(3)</sup>遅まきながら公式帝国の中核であったインドの位置をイギリス帝国経済史の構造の中で理解できるようになった。東北大学の西洋史研究会大会に参加しながら、吉岡先生、井上巽先生、桑原莞爾先生らの一連の研究から経済史研究の分析手法を学んだ。1983 年に初めて書いた論文は、二次文献に完全に依拠した借り物であったが、インド統治政策の「政策主体」(official mind) の独自性に着目した点は、当時はわからなかったものの、後に出会う「ジェントルマン資本主義」論の核心とも重なっていた。<sup>(4)</sup>

人生の転機は、1985 年に「公募採用」で旧大阪外国語大学（現・大阪大学外国語学部）英語学科助手に 25 歳の若さで採用されたことから訪れた。論文は 2 本しかなかったが、一般教育課程英語兼英語学科・イギリス文化担当教員として採用していただいた事で、関西を本拠とするイギリス都市生活史研究会（角山榮先生・川北稔先生）に参加できただけでなく、今まで

(1) 本稿と同様の英語のエッセイとして、以下も参照：Antoinette Burton and Dane Kennedy (eds.), *How Empire Shaped Us*, London and New York: Bloomsbury Academic, 216pp. (pp.117–128, Chap.11, Shigeru Akita, “From South Asian Studies to Global History: Searching for Asian Perspectives”), 2016.

(2) 吉岡昭彦『インドとイギリス』岩波新書、1975 年。

(3) 毛利健三『自由貿易帝国主義—イギリス産業資本の世界展開』東京大学出版会、1978 年。

(4) 『『自由貿易帝国主義時代』のインド支配—チャールズ・ウッド卿のインド統治政策をめぐって』『史学研究』第 161 号、1983 年 9 月、47–68 頁。

全く研究の射程になかったアジア地域研究（南アジア研究）の重要性をはっきり認識するようになった。学内のアジア研究会（現・アジア太平洋研究会）で、南アジア現代史が専門の桑島昭先生、タイ政治社会論の赤木攻先生、中国現代史の西村成雄先生・田中仁氏から、アジア現地社会の政治文化・社会構造の探求、現地事情を押さえたフィールドワークの魅力、学際的な地域研究の方法論など、文学部では学べなかった Area Studies の魅力を学んだ。また同時に、同僚の松田武先生を中心とする近代世界システム論の読書会では、構造論的な世界経済の把握や、従属論的な「第三世界」（グローバル・サウス）認識、システム論を活用した現代史・現代世界解釈の重要性を学んだ。<sup>(5)</sup>

外国語大学は、学部生も含めて、言語を駆使した「外国学」研究に独自性があった。それに刺激されて、筆者は 1986 年 3 月に初めてイギリスを、1988 年には研究対象地域としてのインド現地を、それぞれ一か月訪問した。遅きに失した現地調査であった。88 年 3 月末にカルカッタ（現コルカタ）を訪れ、すさまじい貧富の差・貧困と人々の遅さに直に接した時の衝撃は今でも忘れられない。書物と頭だけでの理解では全く不十分で、五感を通じた肌での感覚と現地の人々（まずは知識人）との意見交換・対話の重要性を認識できた。外国語大学ならではの利点として、頻繁な外国人研究者の来訪、セミナー・講演会の開催を通じた国際学術交流があり、その過程で言語（英語）コンプレックスも消えていった。

1989 年 10 月の**イギリス帝国史研究会**の設立と事務局長担当も、研究上の転機となった。川北先生、木畑洋一先生、竹内幸雄氏（西アフリカ経済史）、木村和男氏（カナダ史）、平田雅博氏らと立ち上げた帝国史研は、イギリス本国史と公式・非公式の帝国諸地域を結びつけて学際的にイギリス帝国の意味を討議するフォーラムとなり、竹内氏の日本大学ファンドを活用して、1991 年から帝国史家の短期招聘を始めた。筆者は関西でのアレンジを一手に引き受けた。1992 年 3 月に来日した A.G. Hopkins（当時ジュネーヴ国際研究大学院）との出会いが決定的であった。Hopkins は著名なアフリカ経済史研究者であるが、当時同僚の P.J. Cain と共に、イギリス史・帝国史を根本的に書き換える新学説の「ジェントルマン資本主義」論を発表していた。<sup>(6)</sup>大阪でのセミナー後に京都の観光案内をした際にも、道中ずっと研究の話題に集中し、筆者の個別研究テーマを高く評価してくれた。帝国史研究の第一人者として百戦錬磨の彼にしてみれば、私の研究など足元にも及ばないように思われたが、非欧米圏の若手研究者の研究を強く励ましてくれた彼の姿勢と情熱は、研究・教育の両面で以後の私のロール・モデルとなった。

## II

研究面での飛躍は、1994 年 4 月 - 95 年 9 月に、文部省在外研究員（若手枠）としてロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (SOAS) 日本研究センターの訪問研究員としての渡英でもたらさ

(5) 松田武・阿河雄二郎編著『近代世界システムの歴史的構図』溪水社、1993 年、240 頁。

(6) P.J. ケイン、A.G. ホプキンズ著『ジェントルマン資本主義と大英帝国』岩波書店、1994 年、189 頁。竹内幸雄氏との共訳。「訳者解説」、I - 2 「新帝国主義 1850-1945 年」。

れた。外大に就職して10年目によりやく実現した国費による在外研究は、学生時代に長期留学の経験がなかった自分にとって決定的な転機となった。SOASの受け入れ先は杉原薫先生で、先生からは単なる史料収集でなく討議ができる研究テーマを持ってロンドンに来るように、という厳しい助言をいただいていた。SOASに隣接する歴史学研究所 (Institute of Historical Research: IHR) にも所属し、毎日夕方5時から開催される多彩なセミナーに片端から参加し、イギリス流の討議の仕方を学んだ。その中心が、毎週月曜日に Rhodes Professor (Kings College) の Peter Marshall が主宰する **British Imperial History Seminar** で、Andrew Porter, John Mercer, Sarah Stockwell ら多くの帝国史家と知り合った。セミナー後の学内パブで飲む生ぬるいエールは、緊張感をほぐし本音を聞き出す貴重な機会となった。偶然空きが生じた枠で、セミナー報告の機会を与えられた。杉原先生に相談して、Cain & Hopkins のジェントルマン資本主義論と日本の経済史研究の接合を目指し<sup>(7)</sup>、イギリス側の領事通商報告を急遽読み込んで執筆した paper で初めて英語でのプレゼンを行った<sup>(8)</sup>。幸い多くの質問を受けて好評であったが、これを機に、杉原先生のアジア間貿易論を活用しながら、東アジアとの比較、日本帝国とイギリス帝国との比較植民地史・比較帝国論に取り組むことになった。本来のインド軍海外派兵問題に加えて、新しい研究課題が見つかり研究交流の枠組みが広がった。渡英前に Cain & Hopkins の大著の日本語訳をほぼ終えていた点も自分の研究をアピールする際に好都合であった<sup>(10)</sup>。

またロンドン滞在中に、IHR 所長の Patrick O'Brien と知り合った事も、後の研究の発展で重要であった。O'Brien は英仏の比較財政史や産業革命の研究で著名なイギリス経済史研究の本流を歩んだ研究者で、<sup>(11)</sup>「周辺」(periphery)の経済成長への貢献度をめぐる I. Wallerstein との論争でも有名であった。最初に会った時は、**イギリス産業革命 (the Industrial Revolution)** 固有の独自性を強調する西欧中心主義者であったが、その後に劇的な「変身」を遂げることになる。ロンドン滞在中の1994年9月には、O'Brien と鶴川馨先生を中心に企画された第一回日英歴史学会議 (Anglo-Japanese Conference of Historians)<sup>(12)</sup> に偶然参加し、後にそれを継承する東アジアブリテン史学会 (East Asian Society of British History) の会長を務めることになる。

1995年9月末に帰国してから、ロンドンで発想したイギリス帝国史とアジア経済史を接続

(7) Ray Dumett(ed.), *Gentlemanly Capitalism and British Imperialism: The New Debate of Empire*, London and New York: Longman, 1999, 234pp. Chapter 6: British Informal Empire in East Asia 1880s–1930s: A Japanese Perspective”, pp.141–156 [ ほぼ同文が、*Discussion Paper, Suntory-Toyota International Centre for Economics and Related Disciplines*, London School of Economics and Political Science (LSE), University of London, IS/95,287,1995 に収録されている]

(8) “‘Gentlemanly Capitalism’, Intra-Asian Trade and Japanese Industrialization at the Turn of Last Century”, *Japan Forum*, Vol.8, No.1 (April 1996), pp.51–65. 以下に再録: Kenneth Pomeranz (ed.), *The Pacific in the Age of Early Industrialization* (The Pacific World: Lands, Peoples and History of the Pacific, 1500–1900 Vol.11) Ashgate, 2009, chapter 8, pp.175–189.

(9) 杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房、1995年。

(10) P.J. ケイン、A.G. ホブキンズ著『ジェントルマン資本主義の帝国 I —創生と膨張 1688～1914』名古屋大学出版会、1997年、480頁。竹内幸雄氏との共訳。第三部「広大な世界」を担当。

(11) パトリック・オブライエン著『帝国主義と工業化—イギリスとヨーロッパの視点から』ミネルヴァ書房、2000年4月、230頁。玉木俊明氏との共訳。「訳者解説」執筆、第二章・パトリック・オブライエン「海外帝国がヨーロッパ人にもたらした利益とコスト」。

(12) <https://www.easbh.org/our-history>

させたアジア国際関係史研究に没頭した。籠谷直人氏、脇村孝平氏らと定例研究会を開くと共に、1995年に刊行された杉原先生の主著をめぐる大規模ワークショップの開催・出版や、1998年から3年間、隔週に京大人文科学研究所で山本有造所長が主宰された共同研究「**帝国の研究**」<sup>(14)</sup>に参画し、山室信一先生や杉山正明先生、杉原先生（阪大経済学研究科）と共に、社会的に帝国論が注目される前から、帝国の「原理・類型・関係」をめぐり比較史・関係性の観点から、帝国研究の理論化・モデル化を学ぶことができた。その集大成が、2000年5月に大阪外大主催で開催した第50回日本西洋史学会大会・国際シンポ「**ヘゲモニー国家と世界システム**」である。西洋史学会としては、同時通訳付きでの初の国際シンポであった。外国人の基調講演者として、ロンドン大学のO'Brien、米国ウィスコンシン大学T. McCormick、アムステルダム大学のM. t'Hartを招聘し、英米蘭三カ国の覇権・優越の特徴を比較考察した。会議後しばらく時間を空けた2002年春に、世界システム論の研究で著名な米国ジョーンズ・ホプキンズ大学のG. Arrighiを招聘してproject reviewを行い、成果は一般向けの図書として刊行した。<sup>(15)</sup>また2000年9月には、大学から別の国際会議開催支援経費を獲得し、ジェントルマン資本主義論とグローバル化(globalization)の関係性を討議する国際ワークショップを大阪で開催した。<sup>(16)</sup>この頃から、「グローバルヒストリー」(global history)というタームを使い始めるが、まだ体系的な理解には及んでいない。

### III

21世紀になると、歴史学自体のglobal turnと共に、筆者自身の研究のグローバル化も急速に進展することになる。学問上の契機は、20世紀末の2000年に出版されたカリフォルニア学派K. Pomeranzの「大分岐」論<sup>(17)</sup>の衝撃と、翌2001年に経済学者Angus Maddisonによる長期GDP/人口推計の刊行である。<sup>(18)</sup>幸い筆者は、国際交流基金の資金を得て、2001年4月-02年3月

(13) 秋田茂・籠谷直人編『1930年代アジア国際秩序』溪水社、2001年、330頁。「総論」（籠谷直人と共同）、5-15頁および第11章「ジェントルマン資本主義と東アジア—日本・中国の工業化に対するイギリスの認識1890-1930年代」299-323頁。

(14) 山本有造編『帝国の研究—原理・類型・関係』名古屋大学出版会、2003年、396頁。第7章「帝國的な構造的権力—イギリス帝国と国際秩序」、257-290頁。

(15) 松田武・秋田茂編『ヘゲモニー国家と世界システム：20世紀をふりかえって』山川出版社、2002年4月、336頁。「序」執筆、第二章・パトリック・オブライエン「パクス・ブリタニカと国際秩序1688-1914」、第四章・ブルース・カミングス「アメリカの台頭1939-1941」、第五章・ジョバンニ・アリギ「近代世界システムの形成と変容におけるヘゲモニー国家の役割」。

(16) Shigeru Akita (ed.), *Gentlemanly Capitalism, Imperialism and Global History*, London and New York: Palgrave, 2002, 255pp. Introduction: from Imperial History to Global History, pp.1-18; Chapter 8: "The International Order of Asia in the 1930s" with Naoto Kagotani, pp.143-168.

(17) Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton, 2000; K. ポメランツ（川北稔監訳）『大分岐—中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』名古屋大学出版会、2015年。

(18) Angus Maddison, *The World Economy: a millennial perspective* Paris: Development Center of the OECD, 2001 [アンガス・マディソン、『経済統計で見る世界経済2000年史』柏書房、2004年]。

までの1年間、ロンドン大学LSEで創立100周年特任教授に就任したO'Brienの配慮で、LSE経済史学科の客員教授として二回目の在外研究を許された。IHR所長職(教授)をいったん退職した研究者が、10年任期の特任教授として復帰するのも稀であるが、O'BrienのLSEでの新たな使命は、1996年からIHRで始めていたGlobal History Seminarを常設のGlobal Economic History MAコースとして制度化する事であった。筆者は、彼の同僚のG. Austin(アフリカ経済史・Global Economic History)と共同でAsian & African Economic History SeminarをLSE経済史学科で主宰し、非ヨーロッパの視点からGlobal Economic Historyの可能性を模索した。

2002年3月末に帰国後の翌03年10月に、川北先生の事実上の後任として、阪大文学研究科世界史講座(西洋史学)に教授として転任する事になった。新たな職場となった世界史講座では、アジア史(東洋史学)の桃木至朗氏と協力して、専修を超えた世界史講座の実質化に努めてきた。阪大内部では、研究科の枠を超える大阪外大を含めた大学院共同リレー講義「歴史学のフロンティア」の組織化<sup>(19)</sup>、20世紀COE/グローバルCOEの一環で「**阪大史学の挑戦**」と称して、中央ユーラシア史(森安孝夫先生・荒川正晴先生)、海域アジア史(桃木氏)、近代世界システム再考(秋田)を三大課題とするプロジェクトを推進した。対外面では、LSEのO'BrienがLeverhulme財団の支援で2003-2006年に組織した4大学(LSE-California-Osaka-Leiden)の国際共同研究である**Global Economic History Network (GEHN)**の一員に加わり<sup>(21)</sup>、杉原先生や阿部武司氏(日本経済史)と阪大での国際ワークショップを組織すると共に、K. Pomeranz, Tirthankar Roy, 斎藤修先生らと3年間で5回の国際会議に参加して研究報告やコメントを引き受けた。ここでの出会いと人脈が、以後のGH研究の推進において最大の学問的資産になったことは言うまでもない。

GH研究のさらなる展開は、2008年の**アジア世界史学会 (Asian Association of World Historians: AAWH)**の設立である<sup>(22)</sup>。東京でNPO世界史研究所を運営する南塚信吾先生から、アジア太平洋地域をカバーする世界史学会を設立したいので協力して欲しいという要請があり、08年6月に設立準備会議のため中国天津・南開大学に出かけた。Patrick Manning (Pittsburgh, USA), Jie-Hyun Cho (Ewha Womans, Korea), Afmed Abushouk (Qatar) 等と2日間協議の上で、学会設立と第1回国際会議を翌09年5月に大阪で開催することを決めて帰国した。そこからの1年間は、準備作業と並行して会議のテーマ、パネルや個別報告の公募、資金の確保に追われた。同僚の桃木氏と相談して、AAWHの独自性として、歴史学研究と歴史教育の接合と、「アジアから展望した世界史構築」(Creating World/Global Histories from Asian Perspectives)を掲げて広報宣伝を行った。幸い、設立大会には日本・韓国・中国・米国・ベトナム等から150名余の参加が

(19) 『歴史学のフロンティア—地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会、2008年10月、9-32頁(序章：桃木と共同執筆)、112-135頁(第四章：イギリス帝国とヘゲモニー)；秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会、2013年。

(20) 懷徳堂記念会(編)『世界史を書き直す 日本史を書き直す—阪大史学の挑戦』和泉書院、2008年6月、191-232頁(第六章：イギリス帝国と近代アジア・日本)。

(21) <https://www.lse.ac.uk/Economic-History/Research3/GEHN/Global-Economic-History-Network-GEHN>

(22) <https://www.theaawh.com/>

あり、国際学会として次第に認知されるようになった。2012年には独自の学会誌 *Asian Review of World Histories* (ARWH) を創刊し、三年に一回、国際学会を地域の持ち回りで開催してきた。筆者は Jie-Hyun Cho の後任として、2015年–2022年に第三代会長を務めた。AAWH では一貫して、アジアからの観点・独自性を重視しつつ、欧米やアフリカの歴史家たちとの建設的な議論を通じた、新たな世界史、GH の構築を目指している。その一端は、シンガポールの南洋理工大学との海域アジア史共同研究の論文集として公刊している。<sup>(23)</sup>

こうした国際的な学術交流と情報発信の成果により、2015年10月には GH 研究プロジェクトが、阪大総長（平野俊夫先生）直属の研究組織、大阪大学未来戦略機構（2017年から先導的学際研究機構 OTRI）<sup>(24)</sup> で文系唯一の研究部門として認められ、資金的援助を受けている。<sup>(25)</sup> 2015年9月–2018年8月までの3年間、Oxford Center for Global History 等との5大学国際共同研究プロジェクト (Oxford-Princeton-Osaka-Leiden-Kolkata) ‘Global Nodes, Global Orders’ を実施した。現在、OTRI の GH 部門では、5年計画で Nadin Heé 先生を中心に Global Environmental History Project を推進している。

筆者は、阪大文学研究科に移籍して以降、5つの科研費研究プロジェクトを実施してきた：(1) 2005年度～2007年度、基盤研究 (B) : 17320095、研究題目：グローバルヒストリーの構築とアジア世界；(2) 2008年度～2011年度、基盤研究 (A) : 20242013、研究題目：グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考；(3) 2013年度～2015年度、基盤研究 (A) : 25245048、研究題目：19世紀アジア世界における開発と経済発展—グローバルヒストリーの観点から；(4) 2017年度～2021年度、基盤研究 (A) : 17H00933、研究題目：世界システムの転換点としての1970年代—石油危機の衝撃；(5) 2023年度～2027年度、基盤研究 (A) : エネルギー危機と1980年代のアジア国際秩序—アジア太平洋経済圏の形成を中心に。その成果は、ミネルヴァ書房とロンドンの出版社から3冊の日本語論集、1冊の英語論集と1冊の教養教科書として刊行している。<sup>(26)</sup>

また、GH 研究の「社会実装」としては、桃木至朗氏が中心となって組織してきた高大連携プロジェクトである大阪大学歴史教育研究会への協力と、そのベストセラーの大学世界史教科書の編集出版がある。<sup>(27)</sup>

---

(23) Shigeru Akita, Hong Liu and Shiro Momoki (eds.), *Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives*, Singapore: Palgrave Macmillan, Sep. 2021, 258pp + ix.

(24) <https://www.globalhistoryonline.org/>

(25) <https://otri.osaka-u.ac.jp/>

(26) 秋田茂編『アジアからみたグローバルヒストリー：「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ』ミネルヴァ書房、2013年、343頁；秋田茂編『「大分岐」を超えて—アジアからみた19世紀論再考』ミネルヴァ書房、2018年、307頁；秋田茂編『MINERVA 世界史叢書2 グローバル化の世界史』ミネルヴァ書房、2019年、399頁；Shigeru Akita (ed.), *Oil Crises of the 1970s and the Transformation of International Order: Economy, Development and Aid in Asia and Africa*, London: Bloomsbury Academic, 2023 December；南塚信吾・秋田茂・高澤紀恵編『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える』ミネルヴァ書房、2016年、420頁。

(27) 大阪大学歴史教育研究会編『市民のための世界史』大阪大学出版会、2014年。2024年3月に改訂新版発行予定。

なお大学院教育面に関して、2022 年 4 月に、大学院人文学研究科人文学専攻にグローバル  
ヒストリー・地理学大講座が設置され、「グローバルヒストリー・地理学入門」講義など領域・  
地域を超えた新たな授業科目も開設されている。